15
319
1

[illegible]

徳5
門
319
巻 1

播伊

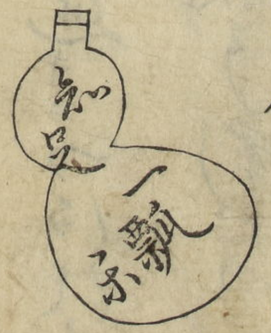
人々懐書(ニシ)より請序(ヨトヲ)こ(ニ)
とし投(キ)見(ル)り不審紙と題(ス)
猶(ユウヨ)猶(ユウヨ)れ景をあらそ老狐の化粧
を[illegible]て世乃迷へるを[illegible]
ちんとに化りて聖[illegible]

先德出て志ゝ世の鏡なるは
究竟に行に其上に何を加へ
是ハ只朝夕言訓し学ぶ俗談
り妄りからくゝ部ゝ系まを解脱
んと志さしたまこと真り一文ゝ無文ゝ

師より代ゝ遠キ知て近キにつゐたき
流レに流て源を知ゝ氣筑ゝ利あるゝ
用ルト捨ルハ可依人に上ゝ日の本ゝ
生て正神のぬゝつまを踏くし
文那天竺代指南り泥溺ルこそ

不審紙序

洛下小社司
源寂仲



不審紙序

愚商某不幸みなし二歳の辰父と失ひ。ちゝのも生得愚鈍にして錦を裁家を遷しても母より教事をきゝ。角の有文字もの生たる文を見る事多く叶ひ故世に遊戯する詩歌連俳をもこゝ描よ小判。又香花乃礼茶酒の和。琴琵琶畫謡鼓笛楊弓蹴鞠圍碁象戯双六。

丁小諷弾瑠璃擕蒲一ひとりとして
始たる事なし。元天宮より成〳〵六月さ〳〵
しよっ〳〵と奈〳〵しく雨中の徒然秋夜の寂寞
まを友とすべき便なし。こいつ先非を悔し
賊後の弓。浴茶の日と暮れば頭痛わ治
それど腹中を傷烟草に夜と明れば気
嚢を散それど眩暈と發ひ是も利なく
彼も害有。倩隙を窺ふ序男ふよ聖賢の

大道ハ書よりずんぐ明めぐまれんぽ日世俗の
諺よ有早下れ是非をとり一ッよハ今日ハ寂
座を補ひ二ッよ多く境界ハ助こなさくやと
称ぐ博識人よ同ど男ど向時ハ發れ客ちハ
人よ浮故よ我國ハ四十七字とあり又
彼有角の數字と隣家よ拾ひ筆に多
至幸便とひろ見んと彼師を候ふと
いつれ衣類も損ぜ疵ども毛色を呼ぶ

知ぬ〻仍而此名を不審紙と誌悪筆
なれど見る者〻ぬるべ〻人鉄鎚と
以て敲ぬ〻見べし

享保九辰の星端午をなゝ暮序
書はゞ筆ゝ絵ゝ浮世行付
きげゝ都の産今ゝ田舎ゝ尾を妬る
五〻〻百拜

不審紙巻之一目録

我國を東夷と云事
世界ゝ外側
佛説無之以前の人乃墮地獄
智仁勇
重盛公乃行跡
五劫思惟
愛宕ゝ出火

天の突張ハ亀の足
極樂乃牛馬
燈臺下暗
孝經まて親の面を打
極重悪人無他方便　以下畧之
三輪の謡
伍子胥の賢
湯殿山の御來迎

御寺の門松
雷鼓の評
敷金持奈の長老
出家の淡嶋
四書回春平仮名附
醫者乃賢虚

不審紙巻一

辻本氏嘉茂編集

我国を東夷と云ふは
吏記国史に神代より系図大神天皇より御門正統を改め
ど今に天子とあがめ奉る。大和の源。誠に君子国。
御るに此国の人が此国を東夷と覚てさらふ浅
ましき農業全書といふ文を出して京服は
足へよ紀州人歌きけるに東夷狄にして夷狄よ汚まだと。
酒を参らるゆよ書れらといへた。かんいの浦ごとし。
そも京国と東夷といひ何のゆゑ異国の法と見ひ

海内悉く王子拝領せし所へ貢せられけ
る書に日本国の天子より日没する国の天子へ書を
とる事なし世俗に貢とる所さへ世界又日本へ貢
し来る事の日本は夷狄と云せ異狄と云し来
る事なりとて筑紫より点ぜられる事も
上代よりありしや是皆利とるの謂なり。
実国なるものも仏法さへ中と定る事いたす
といふべしや。愚者孔子を嫌ふ如くば異端ふと
叫る目出度あらんといふ

世界の外例

節用集に見れば鼓の胴ろくろ須弥山の図あり
上に切利天下に那落迦に限る世界
有り日月横に廻るよし是仏説より出る図
なりと又孔門の人よこへ地の圏饒日月上下して
巡ると云説に見まで世俗へ伝へ行なわる其外
例一向に所位定りなし

仏説に云く人の堕る地獄

出寺の法華経と笑ば仏説にもなきよの地獄に堕る

ゝ。仏法い狩迦のはらう婦てゝ生るゝたんぱ丈
すぐい佛乃字も去ゝ志ゝぬ者ゝ乃ゝ地ゝ獄ゝ
ゝ乃ゝ法い落る地獄も浮ム極楽も形く狩迦乃来
の新地用發元

智仁勇

此三ツいとゝろゝれ法法又い昔法仲れ光ゝ
操みてゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ用ゝ乃い澤婦婦ゝり
法ゝ乃ゝるゝ乃ゝ乃ゝ者ゝて下者乃いゝ者ゝ乃ゝ
覚ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ乃ゝ作ゝ我ゝ法ゝ三ゝ極乃神美とゝし

ゝ乃ゝ作ゝ法ゝの口ゝてゝのゝそゝい評ゝずゝるゝと言ゝれゝあゝり。
天照太神ゝより皇孫へ直授ゝ乃ゝ寶ゝ乃ゝて神化
自然の財ゝ乃ゝ種ゝ乃ゝ周の鼎奉ゝれゝ乃ゝ璽ゝ乃ゝんゝどゝの
ゝごゝくゝよゝ人ゝ乃ゝ工ゝとゝて他ゝ乃ゝゝるゝものゝにゝあゝゝゝに。
ゝ乃ゝと神代ゝより出ゝ乃ゝて智仁勇乃三ツよゝひ
ゝゝゝく。三人ゝ乃ゝ下万民に到ゝるまで。身中は
具足すべき理を。ゝゝゝゝゝめ志ゝ法ゝ無況
なゝゝべゝゝ乃ゝとゝゝゝゝて犁耕。糞土の童子と擔
荷ゝゝゝい農の勇ゝ乃ゝ。石工ゝれ岩石とゝゝれ松乃

木ずへよのごとく枝うるを枝に移る事を恰も多れどもこれ足工の勇たり千金小易て米穀と換大海越行り百金と捨て土石と穿て珍寶と探る外高し勇あり農工高たに有仁のぬしも。

若し是せばして豈今日の世勢成る所以やもしたるべし農工高い耳扶の朝のくらるとを見て

愛るき武士い十あの金を懐中ゆく戦交う拾り足ら史金殆い宝を懷の金と呼温涼し家と石ス使番たりあて形ぬりの又猴にたづむべき

みもあるべ命と蕃塀ゆりもうるんじ拾ふ市多にしてまづ先金を先ひ眩暈し教するなどのあるほしとあり人ど若を多れ見るべるるもに癒とべき若れ

重盛公の行記

平お國の嬌男重盛公い吾ほの聖人たりとの いひ伝へあり公恐慮よ積で故義するほどのみを見へば家とるに世万並よりすぐ事とれを ちる市生るあれた又清盛公乃悪逆ゆく朝廷他 家れ人くい泥よ醉しるやうにあるべ。そを逆改り

引合せられ水際こらげて遊歩人馬
して文の無遅止しめ給へ兄弟止どんじ魚に命令
こり給へとこくいかまべ云甲斐なし出れ
さかにたらげりしく云さべ命とまつこう。
力とけくして又狂ひ給へるや。君三ゝび涙めて
身ひざる時い分遅さ。又三ゝび涙めく身ひずんば。
遅て又時とゝく涙も。如何ととも。涙迫しく
迫とも涙つ。死て仕色といまゝ涙と流れ婦人
の仁なり。大臣重世間ゝく涙め給へゆへすてにッ

ゝ又涙入給へるのゝ。相國百年後まで門府か
くしまさべ。又は悪逆ほどまで。諸色とゆゝく。
なを絶まゝ。扨又支那は育王山とやゝ。
こやゝへ金渡しそも何ゝ。ぱせいのひろ。
ゝより出る火ぢゝ。死の世へ行。水も筆はゝ。
ものと。背中にわてんとひめやさめとちゝ
給へ。日の見も人へ裏底居れ。ゝら若ゝ
かゝゝ。鉢坊主ゝ。筋ゝ美男癩云智は尾入
ゝが。法ゝ光彩ゝを来一生の大守ゝ。

山中古代より建立所の寺院清水寺
社いとゝ多く　霊験あらたなる四の宮八
幡神　歩行の端のみやゝ小社　毛沢山ぬさうじ
自随落魔ごとに　れ新と　くと　ぐ
地　治　の　たぐ　むる　寺ほの費民
労　ほ　さ　秩人傑が禹王の廟計　て
断絶　ゝ　れ　ぐ　ま　り　ま　い
へども　民孫　け　び　の
苦　治　に　の　ゝ　ゝ　ま　く

市中にも流行多く　ゝ向ひ合人の家宅こちら
行ば赤地の衣裳　ゝ　ば法人目列く行
春ぜば鐘　百八煩悩　眠さは　大功徳あり
と　法　日　説　い　ば　昔　た　べ　遍
の昏鐘　よ　ゆ　こ　人今日　書　ら　死　び
枝　ゝ　ば　の　も　怪　と　記　て　の
あ　に　喜提心　発　ゝ　る　功徳　く　東
面　う　鐘　と　紀　ゝ　人　射　て　勇　と　法
よ　物音　聞　ず　て　学　ば　法人　扱　ま　く

と。罵詈或い又戒乃飲酒あるく。ゆうく熟睡し却て
無ものとなすん。譬人となりけると。情や清れ
響音に眠とさまし。百九番目の煩悩。勿よとうり。
下女れおむに種の下ふるよゆ〜きぬ欲のはわつ
る自慢れさちぐ。蕃。こけて丸きて絶お腹ふてき
あぐれい強さまこ。出門後られ。お焼餅りえ豆げう
の出腹豆。誠に美捲外煩悩とやいちん。美言無よ
客外くさいなりるはりかし。一樹と代ることし。
仏よ美るるおい。如夕人れ礼あと更下法よたう

るおい日〜人よ嘗くく行ものも見ひやうにしう。
彼と楽し。是とるくん。伴の汚りきち社と減ど
の出恵こいとうつ。伴いくどてる泥仏閣城。
御〜び被却すべきにあるび。網とうり魚鳥とうる
よ。三方にうけて。一方のうまと用る。足外其尻却と
動ざれねちりいちんやに霊宮よ人名はさう
清浄の法門おぼよ重く甚益あり。こう神儒仏の
教と。帝王候のいうしめも。艫綱とこいく私と行り。
河よ抑〜んとせばらうと竿とてう。磯にうんと

せばおもし樟こち樟。艫拍子そろへく。武万歳と謡ひ。
四海波をげふはもおさまりぞうくの舞をなのし
まりめんるをまいぶは中ーてぞこりるなれい。
有海じるのたるる

五劫思惟

天人て澤つてぞ四十里四方の石とぞ衣と決て三年
に一度づ。掻くなでて無ーる代一劫といぶを
五ツ合せる年数四案ーぶるるや十年二十年
乃至三十年。五支ーて出ぞる分別が生あるる

思りまじ。百劫の損速あも沈めせぬ今れ世の黠者人
ご色を真とこうこう。れうーられ却て仏説よ。方便
おりをと幸に未世乃信。己が利速成る虚言と説く。
流生を海どりと。尓時世尊の毒よりて沙羅
双樹ぬりとに。切ーぶそれ切利天よれてう
まじぶは母摩耶夫人の方へ安え一貼れ茅を夫ろう
落ーるのひけまじるも。猶や末の枝にうら。恐れ
ちぶ。古業用ひーまじ。て流よ入滅ーるるや。
先ぶ四く自ぶ球の外乃涅槃るる。又この示れ本に

をりうるを。作爲竿作かくこゝざるべし。縱竿乃
こゝ記るある程なりとも。足疾鬼と追掛の〻ぽま
際ゆくい。韋駄天の働にこれをつかるものの行一
市業と儀よ入生姜一ゐ死すで濡〻まで奥どゝ
まぐれ出ぐるひゐたるぐ〻ぶげやりよちうれ出
祇御のこゝねこそかこ
毫宮うゝ出火
仏者に問ぐ地い地義芙蓉ちりと云くゝ釈尊
彼經と説の〻附地うゝ涌出の〻ぽ〻うれ大中。

三世の人い札銘ちりしてゐ足拍ちうりゐゆまゝ祢の
民人の世とうけば祢可遇突知尊ちりうゝ。
太陽乃祢ゆまい火深と祢うて役ゆる祇義の火
清牧いまゞ突及ちばそれい卷もゆまと南とゆま。
ひう毫宮よ市火ゆう。祇分火の用ゐれうこそ〻
分ぞ人ゆるふ示嶽も出ゆるものとゆく祇れ乃
祇ちうゐたひ〻〻。乾用んよいちゝゐものゆ
天れ突法い亀れ足
突紀云文とんうる人の世とうけば背〻夫ゐ池義

とちくりける間一女中ゝ細工に亀乃只さゝやてぱりの
ちりといさまをるの少人天不審地走らう天面小よ
傾さ有とゝや。そゝ己後絵書清ちける海法ゝだ。
爰伝万年ゝ成べし。爰ゝ此裏に爪ゝと見ゝど。
因安ゝ変ゝちゝ。愚も亀の足と頂へ水なれ植の根
さ住変りの形ゝ

格子牛馬

格子ゝ牛馬
食炊佛位少ゝちゝ

の屋とゝたゝべ下和下ゝ牛ゝ牛ゝ
生ゝ生ゝんゝゝ。此世乃人道失ゝんゝ

炊暮下暗

茶湯者ゝ子に。茶湯下ゝ。徧師の子に。徧下ゝ
思商家ゝ生ゝく。猿佛ゝ至格好相ゝれど。下ゝく。
分具ゝ頂ゝ。ゝ。平日ゝ。ゝ生ゝ
ゝき下ゝゝ仕形ゝ。或人ゝ業ゝ音神ゝ
法人ゝ寄ゝく。ゝ嬌子ゝ学ゝ
て師ゝきゝ。茶懐ゝ。ゝ学ゝ。嬌

孟よりこのかた倩おもふに。菩薩の教も。皆儒理に落佛
理にまよふもむなりけり。すいぶん釈遠ひあり。往らく
・神代巻。日本紀。続日本紀。旧事紀。古事紀の類
より。読あらしめ。れ身の為とあるべし。
抑好力ならば。儒弘乃やれにあまぞん。益ある事益る
きを。其外公平が地獄めぐりなれば。終しさ。山桝
太夫がひせるかのむごさ。浄瑠璃本なれ書せ川
まうの末摂。西川が豆右衛門。よくべく何をとかも。か
次才に見給ば。召よ子よとしへらまて漢ひ漸を

源ると申ん。とれぞれ卑ひ所も。ひんやうになり。益
あるまじき事のあるなりけれ。儒学の力なりでハ。吾
神乃教ハをまぬとり理わらん。や。医者が薬力にかし
て。武士が商売れまとよく知とて。我家乃るまり
委細なるしらじんハ。実に備屋めして。本家をとう也し
あるべし

孝経ニかく。親の面を拝
親ハ下愚文盲なるに。子ハ石礼の吸物と。亭物が好物に
生けさ。親の志ぬまを知りゆく。尤で。親と乞ん下れ

家多くの人へ寄り又乃を行とて親と爲ずくめ
れる数親い文貢みして子とひつうきものと云く。
若き者虚して死ざるもの眼前に見たり平竟
親と孝乃稽古れ古ぬる事紙ゆゑるもの也

極重悪人無他方便 以下畧之

殘口師の曰一遍れ念仏ゆゑ極楽往生とるなれい。
弥陀も盗乃日記ゆゑ又い全く悪心なく不法なること。
廉ゆゑ不吟味ゆゑと云く。愚奥常の地より超ゆゑ
呵一山村に若き女救十人一度ゆゑ脇ゆゑ

ゆゑ有やうんと弱ゆゑ乃ゆゑれで地蔵仕業ゆゑ
そかの村ゆゑれまに立ゆゑ右仏とゆゑ拵ゆゑ
けまべ件れ怪偉魚止ぬ地蔵の仕業と情ゆゑ性より
屋ゆゑ山地蔵も彼一遍の念仏ゆゑ下車れ性
生ゆゑ婆れ迎会ゆゑ婆れ迎会ゆゑ
仏不思議と仕出ゆゑ盗根性ゆゑ乃
盗根性ゆゑ造作仏ゆゑ拾ゆゑ
物祝音ゆゑ梅とこれ。文殊ゆゑ脚気病ゆゑ
屋敷の孫勅止ゆゑ

三輪の滝

玄賓僧都いほりの外ごうようくなる人とゝへてゝいつも
樒あかれ水と汲でまゐらせいと懇へぶよ三月ばかりも
見てゝ月日経年とうるゝ水と汲でゝゝゝゝ住所を
さとりて遁去りんぬ一ヶ所ばかり掛ゝとゝや裏居すで
幻滅入る此数まぐゝん在ゝゝむごさ雲雷日猶し
月あいゝゝや雨祈とわびゝ此をよゝくゝゝゝ若
芳かされりんともよびきりのゝ富有ばかり出
入ゝて尾とゝゝ遁居世捨ゝゝゝゝ日

ゝゝの為やゝて波世の深と費ゝゝ富家貧と
年じゝわびゝ食を乞ゝゝせびゝゝゝ二百文ゝゝ
でいゝゝゝゝゝゝゝ切ゝても日来たゝゝ日勤
宝にくいゝ日又信ゝ日雇賃よ富ゝ深よ富有の
ものゝ日ゝくゝ大家ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝたゝゝ切も乞ゝ乞ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ乞ゝ老よ二代ゝゝゝゝゝゝゝゝ
情ひべゝ雪一ヶ所ゝ東福寺建立の時ゝ大災と心元
なく思ひ歩く巡ゝ場と自ゝ巡ゝゝゝゝ

太宰小弐を窺ひたへど。さりし犬のやげふく。綰帯にかをらざれば翌日細工の父子を渡し居ゐくとくゝく。純白の昔労せ。やすあらしせず。深更まで寝ざるりを成ど。竜若の作料を給りけるをおん営く流とあたじ悦びきり。数百年の今にいたりて。末福寺の伽藍に異災なき儀は。諸人の身の仲を去ば流して成つさる。七堂あまとじとり。実書の吉札の力なく勝るべし

伍子胥が賢

伍子胥は。呉王にほそへて賢人の名ありて。越亡びく後。呉王奈りて諂色し。さどこれむの大くさあらうむしして。政りに怠る。伍子胥諫といへとも。呉王さらに胥終に誅死をとく。倩おもふに。義なり忠なり。今れの盛激せざるものあらんや。楚平王の墳墓開き。死骸に捶りるよし。若き時は。かかる血気の勇れありて。無分別なり。勝く年を積老と歴によりがひ。おとなしくなりけるとかんくしり。平生血塵なるべきか。柳下恵が人の妻を郎同席に卧て。婬せざるとも。振袖角前髪時代のことなりしか

ど性よ七八十羅れはたらくべし。血を吸の恵ぶ。人
の妻と成りて夫の法はさうぶ。絶び是又血腥くこと
りつべさう。思伍子胥下恵に一毛も似るべきこいあ
ねど。美女を懐かして所し。嬬せばとうの情合
ぐ。ぬるひ義よ者くれぬんせばとも言とん
と敵中に戦くびる戦あるん。柳氏の表似とさば
吏姫れ別い怪しべきこうの。人の今紅葉陵よりを
うして。己が頭れおけるとちくざる。甲芳ちる恵と
するこの世に美し。天下の言葉ぐれとしい

あるども。人れのうへざるりのと。盗ひんいすべと日
まで い費せびをれるい。家身ちぐくもかけて形。
地情の恩戦にあくべ。嬬吏して。おうとんとこの吏り。
嬬ふれ隨一ちうを。邪にちうも。恵くないのうどかく
他の書亮とうんべ。根よりうけるねが。氏表怪るうん
さうくとをに地紙とかるいやざれるちうべきう。
僅れ豚ちり金乃失さるに紙と吏るの死しても根を
去まりく。はおしきこ牙ちり。他れ今猫戦ちりの
門りく例へい雲く停ちぐれる。孫表あちりど。件

不籠絵巻一

人ごとに成富にいとなびたらく実ゆまとど山ふかい家又
我とはしらずとかく生涯を終れば仏とも情れ一つ月日
湯殿山の御来迎
出来迎とは阿弥陀如来ちらや歌世の時代天竺
あくまで性よりとはいとはるといてもんぬるし。凡有
情地獄に容あるるものは一度び滅せざるもの。
三界を離れとあれるは愛ぬすべし。仏法の弥陀信
の盤石。永劫は国常立尊皆生死なり。湯殿山
あくまで性にあらずといふ人は仏法の弥陀信

弥陀の西の九十万億国土の背ゑるイ。単イ。瓦けさうゆ
う。柏瓦であるとう
南寺の門松
門雲い家神仏の風俗ゆえて家神は仏教い仏法と
雲泥の違ひ。八百八十七廻ついとうぬ千年もひ
ゆうぬ。ぬとべく大和尚黒法ぬと指和尚黄
檗は仏と御ぬ。ぬと英ととる徒の事に
あるざるる
雷敷は評

雷い法湯の破激を外山説無くちりとるや。又墮ち
ものとえまじ。瓜れ地獄の毛ちどりなり。或人の曰ふれに
冬月雷鳴する事あり。容小猫けだし。遠付重る
ものあるべし。何の讐もかさび。鉄の海ゆくにるべ
言ふるも。夏月雷聲と共と。急勇猛力出く。彼海と
拽切。猫去とゆり。去るまじ雷火よりれてひしく蔵
る獄あるるりのゆまさ仁のるものゆ事始きん。強留とえれ
ど。猫牧林ゆりに。大敵とたちぎ合せられ因り彼
鬼形ありて。蛇れ巣に似ると。水れ滝三戈留強と

いへ去相出るとえまじ。雷敵の撥と強留ゆも去れるる。
此作者は得正路ゆて。人れ行るにはるせりしあ。義
のゆ云ふるるしゆ。戯りのゆ曰。世ゆかりしゆるれ嫌るの
ちるゆ。地震と天りてゆ。雷と地中にるるせ
変るるゆ。ゆづまと裏さしゆ。色煩よ石れ林も叶ねゆ
かゆ。そてもいるくんんるのちるゆ。だもあべし。
雷声とげしくゆ。ゆまじ。まるんゆ。振ちるる
るゆ。ちれるくゆるべきるりのれるゆ。ゆ人ゆ毛
家煩ちる。項羽とあゆ。さひき。呂布とるりゆ。勇

あらとも。雷にうたるゝもの。數芸よりつくべし。ちうれば至て、あらあらきこのるゝ。又柱より入耳とうるれども雷鼓雷電の語に加勢と称をむる勢にてこの二入。

そしたんがな霊魂やわらんとのむにぢうひ。色愚痴たちう。邪よりわづこと出ん。密室に居まこび用ひうしと。

いとりのようにうこび。洪恵をうしても。おんでうれ。ふをぎやう

あれとうれたりたれど。凡若しく為べきあもわづこび。

あらしかぐら。蝶とうんそ。身れ色城豆。基為ふ人ひう。

その親戚さたるゞ成。いうりて。多くれ蝶と一室に集め。

三門へ彼子と裸身して色迎村ゞ。色ちう婚交りか

たらしを。為ふて。初めてけゝうりあるゞ。湖邸にちう

けるゆへ戸を開さうんまこび。多くれ蝶。うれるう肌よれ

ばさるいあたう。倩おりふよ。ねさちうしゝ。べども。武士

のやかもり紙ぱいとえ若しゝと異へど。後中れ出の始ふ

るもれたう。或人の日。雷陸て。豆本又い柱乃就よ

うにばきのぼるうこのちうまこび。豆本おれ例よ居ゐ

りのぼうこ寄南と婚ぢ。ゝ下ゝい居ゐりのちうと。色

多いたもあうべし。又一愚人の日。菓酒ゝ外一切候

食の四行ちりとも一二種あわとして三五ずんば
あるべき止それ西へいき畜産ども思ひ合ふと蛙
ふるちりだわるべ蛙ろまれ蓋のひ
ゝわと一生動くものにして食べらべと笑ひる
数合わ糸れ出者
文仏牙子いるとあるとうり三五一緒みて口に味と
これまべ分に糞雑衣と云ゝ名も利もなるを。
うりあも着とゝゝ者ちく。愚癡れ凡俗は三世因
果の理と説く正理に導く仮人ちり愚俗に

仏とも法とも学いまべ道不幸悲よわひくゝしめ
て参れ美術元新おと悟り旅と他じ山宝家ゝか
悲傷れ修りゝゝ出るゝ。花小稚れ母ゝ。花ゝ嘆とこれて我花
ゝ。ひゝき振廻れ
出家ゝ法ゝ修ゝ
以作来初に多くゝゝ。法ゝ大的神い勝ゝ下
の病と食ゝゝ。僧称れ人小ゝ紙雑と
ゝゝべ。ゝの門ゝ豆腐起と法ゝ帯下れ症ゝ血

白血の病毒よ者〳〵ゆ新の女ちんど乳者し
さよ。毛に美物をお〳〵まんびやるゝむちる。情形の
見出ゝ仰もたうゝ振色外に浸世いるの

四書同春乳平仮名附

所仮名もよゝゝ人の四去乳乃博識
どゝさゝどゝも探べきみもたゝ乳みそへ
のゝ〳〵て実一章も探と明めゝゝゝゝ乳毒ゝて。
ほさゝんゝた紙巳去いゝゝくもゝゝ乳胃ゝ探乳
を者の害もゝゝゆゝ。彼を仮名かの療治とゝる

人ゝ河豚乳毒味にひゝゝゝうゝべきゝ

腎去乃腎虚

人ゝ毒ゝ乳不去生海ずゝふ及ゝゝ趣ゝる庶
の腎虚ゝゝゝゝ柿ゝゝゝゝ悪妻。拙女に溺色
て。全虚い去ゝの腎虚せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ変的人ゝ乳妻乳自由ゝゝゝゝゝゝゝゝ
家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人乃癖ゝゝ紙ゝゝ腎虚ゝて死ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乳ゝゝゝゝ妻乳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

五七三

かゝることをてをはなさてこの道ちくばいのりを
今い名誉の山ゆく。世に心中そ指南人死とな
ものい一揆ゞ三文より下で古文よ。貴賤さん世上ハ
笑ゞ名ものる。是ようくねゆちうゞ義死の場し
件ハ醫者ハ腎虚ゆ。ちうくべきハ

不審紙巻一終